

入選

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験
「見えない病氣と闘って」

山梨県立甲府第一高等学校2年 堀川ほのか

私の病氣は目に見えない。

自閉症スペクトラムと診断されたのは、中学二年生の冬。もうすぐ受験期を迎える時期だった。学校に行くと、すぐに具合が悪くなってしまう、早退や保健室へ通うことを繰り返していた。それと同時に、「なぜ自分は周りの子たちのように、元気に登校することができないのだろう。」と、みんなの普通に追いつけない辛さを感じていた。そして、心身の不安が大きくなり、かかりつけの小児科に行ったらと、このような診断を受けたのだ。

診断表には数学が極端に不得意なこと・断片的な情報だと誤った理解をしてしまうこと・空間認識能力が劣っていること…などの情報が記されていた。確かに、数学はどれだけ長い時間を費やしても平均点には届かなかつたし、親や友人との会話がかみ合わない時もあった。地図を読むことがとても苦手で、一人だとたどり着けなかつた場所もある。

体調不良の原因は、長年の自分の感じていた違和感が重なっていき、そのストレスが大きくなってしまったものだと、と教えてもらった。この時、原因がわかつた安堵感と、この病氣とどのように向き合えば良いのか、という不安が混ざり、私は混乱していた。

その後も改善の兆しは見えず、不安症を併発し、眠れない夜が続いた。また、喘息・蕁麻疹といった症状が新たに始め、処方される薬の量もだんだんと増えてしまった。そして、私の心は徐々に絶望に押しつぶされていった。何回目かの診察の時、診察室の中で暴れたことがある。効いているのかも分からない薬を出され、流れ作業のように追い出される病院に、遂に嫌気がさしたのだ。先生が、私を心配してくれていたのは良くわかつていた。しかし、「なんで治らないの、頑張っているのに。」

この感情でいっぱいだった。頑張れば頑張るほど、もがけばもがくほど、辛い現実には打ちのめされてしまう。何度も消えてしまいたいと思つた。そして、私の怒りは母親にも向いた。「なんで、私を普通に産んでくれなかつたの。」そう言つた時、母はひどく悲しい顔をしていた。

自分を傷つけ、周りも傷つけ、私は人生のどん底にいた。敵が見えないのだから、戦いようもなく、毎日訪れる発作に怯えることしかできなかった。

しかし、私は自分の考え方を変える、ある発見をした。それは、記憶力が優れていること・語彙力が高いことと記された、もう一種類の診断表だった。ここで私は、他の人より突出した個性があることに気付いた。これは自閉症の人によくある特徴で、ある分野で並外れた能力を持つことができると言われている。私は、少しの希望を感じた。

そこで、自分なりのやり方や考え方を身に付けていくことにした。数学の勉強は、問題ごとに解法を暗記し、受験も持ち前のしゃべりを生かすために、面接形式のものを選択した。勉強面だけではない。他人との誤解を生まないよう、分からないところは素直に質問をした。それが、誠実でまじめな人間、と言われる私の良い人格評価にもつながつた。そして今、私は希望した学校で、最高の仲間に出会って、日々を過ごしている。

今までの私は、自分と向き合うことが嫌いで避けてきた。自分のできないところにも、向き合わなくてはならないからだ。しかし、一歩ずつ自分を知ろうとすると、短所だけでなく長所も見つけることができた。今でも、この病氣は嫌いで、決して病氣になつてよかつたとは思えない。しかし、この過程があつたからこそ、自分という輪郭を捉え、他の人にはない能力という、希望を見出すことができた。私は、私で居ることができて本当に良かったと思つた。

私の病氣は目に見えない。しかし、もう戦い方は知つている。止まっていた時間を取り戻すために、今日も精一杯生きていく。